

イケメン教師の受難

―伝説の運動会篇―

第二巻 陵辱ショーのはじまり

海老沢 薫 著

## 内容

■ 著作権について

■ まえがき

■ 第一章 全校生徒の前で裸踊り

■ 海老沢薫 B L O G

■ 海老沢薫 W e b 連載小説

※ 海老沢薫 B L O G

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■ 著作権について

「イケメン教師の受難——伝説の運動会篇——

第二巻 陵辱ショーのはじまり」（以下本書

と表記する）の著作権は「海老沢薫」にあり

ます。

・ 本書のすべての内容は、日本の著作権法、

及び国際条約によって保護されています。

・ 「海老沢薫」が事前に書面をもって許可し

た場合を除き、本書の一部、または全部を、

あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファ

イル、ビデオ、テープレコーダー）により複

製、流用、転載、転売することを固く禁じま

す。

・ 著作権の侵害につきましては、著作権法第

119 条などの罰則がありますのでご注意ください

い。

■ まえがき

運動会の目玉競技の一つである借り物競走で、まさかの糸纏わぬ姿にされてしまったイケメン教師の三神真琴。

真琴は恥ずかしそうに校庭のど真ん中に佇み、借り物競走が一刻も早く終わり、生徒達に貸した自分の衣服が返ってくることを祈っていた。

しかし、そんな真琴の願いは脆くも打ち砕かれる事になる。なんと、糸纏わぬ姿の真琴の元に、またも担任するクラスの男子生徒田沼が駆け寄って来たのだ。

もう何も貸せる物を持っていない自分の所にどうしてまた生徒がやって来たのか・・・

真琴は不安に駆られながら、田沼が差し出した紙切れを見た。

するとそこには、恐るべきメッセージが記されているのだ。

『担任の先生に腰を振って踊ってもらいながら一緒に校庭を一周歩いてゴールする』

それを讀んだ真琴は、自分がさらなる羞恥地獄の深みへ突き墮とされることを悟った。「先生、早くお願いします！」

田沼は呆然とする担任教師に向かって必死に訴えかけ、さらには弱みをネタに脅迫まですると、ついに全校生徒や父兄達が見つめる中、真琴を連れて一緒に校庭を歩き始める。

一糸纏わぬイケメン教師が両手を頭の後ろで組み、腰を厭らしく振り乱しながら校庭を練り歩く姿を見た生徒や父兄達は、その衝撃の光景に熱狂し、真琴に向かって容赦ないヤジを飛ばした。

「アハハッ、あの踊りめっちゃ面白え！」

「教師があんなマネしていいのかよ（笑）」

「キャッー、三神先生過激い！」

真琴は激しい羞恥に襲われながらも、一緒に歩く田沼の命令で作り笑いまで浮かべさせられ、全校生徒や父兄達の前で卑猥な裸踊りを披露し続けるのだった。

■ 第一章 全校生徒の前で裸踊り

全裸のイケメン教師が逆立ちで校庭を一周歩き終えるまで競技は中断し、全員の視線が真琴一人に向けられることになった。全校生徒や同僚教師達はおろか、運動会を観戦に来た父兄達にまで精悍な体つきとその中央で反り立つイチモツを見られてしまった真琴は、どうしようもない羞恥と体力の消耗によつてフラフラになりながらも、島岡と一緒ににゴールへと辿り着くことができた。すでに同じ組でスタートした他の生徒達には全員ゴールしていたため、島岡の最下位は決定していたが、それでもイケメン教師の陵辱ショーに満足した生徒や保護者達から割れんばかりの拍手が送られた。

「三神先生、みんなに自慢のチ○コを見てもらえて良かったね！」

「先生、大きなチ○コ最高だったよ！」

「今度から学校にいる時はいつも裸でいな  
よ！」  
生徒達から心ない声が浴びせられる中、よう  
やく逆立ちを許された真琴は顔を真っ赤に染  
めて、再び元の場所に戻った。  
校庭を埋め尽くす全校生徒やその父兄、同  
僚教師達に大きく膨らんだイチモツをおもい  
きり晒し、その形や大きさ、色までをハツキ  
リと見られてしまったと思うと、真琴は恥ず  
かしくて堪らず体の震えがなかなか治まらな  
かった。  
それでも、そんな全裸のイケメン教師をよ  
そに借り物競走は再開され、競技は淡々と進  
み、愈々終盤を迎えようとしていた。  
応援席に座る全校生徒や観覧席に座る父兄  
達は、最後にもう一度イケメン教師の陵辱シ  
ョーが観られることを期待しながら、声援を  
送り続けていた。すると、そんな彼らの願い  
が通じたのか、真琴のクラスの生徒が全裸の

担任教師の元に駆け寄り、手に持った紙切れ  
を見せたのだった。  
「先生、コレお願いします！」  
そう言つて紙切れを見せたのは、田沼とい  
うクラス委員の相葉達と仲の良い男子生徒であ  
った。  
もう誰も借り物に來ないことを祈つていた  
真琴は驚いた表情を浮かべ、恐る恐る紙切れ  
に記されたメッセージを読んだ。  
『担任の先生に腰を振つて踊つてもらいな  
ら一緒に校庭を一周歩いてゴールする』  
瞬間、この借り物競走がやはり自分を辱める  
ために仕組まれたもので、それは想像以上に  
恐ろしいものであることを思い知らされたの  
だった。  
一体僕をどこまで辱めれば気が済んだ、  
お願いだからもう許してくれ・・・。真琴は  
この紙切れに込められた底知れぬ悪意に怯え



きつと自分の弱みを握る相葉達が仕込んだ物に違いないと思った。「先生、早くお願いします！」田沼はさっきの島岡と同じように、戸惑う担任教師を容赦なく責め立てた。「そんな・・・」真琴が拒もうとすると、担任教師の弱みを握る一人である田沼は、それをネタに脅迫し、真琴をついに屈服させた。「さあ先生、行きますよ！」田沼はそう言うのと、真琴の腕を引っ張り強引に競技に駆り出した。「オオッー、あの変態教師、またなにかさせられるみたいだぜ！」「今度は一体何を見せてくれるんだ！」「キャッー、楽しい！」素っ裸のイケメン教師が再び借り物競走の餌食になったのが分かった、男子生徒も女子生徒も酷く興奮した様子で身を乗り出して見つめた。

「先生、それじゃあ両手を頭の後ろで組んだ  
恰好で、腰を振って一緒に歩いてください！  
田沼がそう命じると、もはや逆らう事のでき  
ない真琴は言われるまま校庭にいる全員の前  
で屈辱の姿を披露した。  
「オオッー、何だよアレ！何か面白いものが  
見られそうだぜ！」  
素っ裸のイケメン教師が両手を頭の後ろで組  
み、大きく膨らんだイチモツを丸出しにした  
恰好で腰を左右に振り始めると、応援席に座  
る生徒達はさらに熱狂した。  
ああっ、恥ずかしい・・・。全校生徒や父  
兄、同僚教師達が見つめる前で卑猥な裸踊り  
を披露しながら歩く真琴は、あまりの恥ずか  
しさに軽い目眩を覚えていた。こんな全部  
ウソだ、きつと悪い夢でも見ているだけ  
だ・・・。真琴は心の中で必死に自分にそう  
言い聞かせた。  
「先生、腰の振りが鈍いですよ！もっと激し  
く振ってください！」

すぐ後ろを歩く田沼は、担任教師を厳しく叱責すると、そのお尻をピシッと平手打ちした。  
「ああっ」  
お尻に伝わる痛みによって真琴はこれが紛れもない現実である事を思い知らされ、絶望的な表情を浮かべた。そして、クラスの生徒である田沼に命じられるまま腰を左右に激しく振り始めたのだった。  
「よっ、変態教師！」  
「先生、チ○コも揺れてますよ！」  
イケメン教師が裸踊りをしながら目の前を通り過ぎると、生徒達から容赦ないヤジが浴びせられ、真琴の羞恥心を煽り立てた。  
「先生、それじゃあ今度は腰を前後に振ってください！」  
校庭をようやく半周歩き終えたところで田沼がそう命じると、真琴はそれまで左右に振っていた腰を前後に振り始めた。  
「アハハッ、あの踊りめっちゃ面白え！」

「教師があんなマネしていいのかよ（笑）」  
「キャット、三神先生過激い！」  
イケメン教師の新たな裸踊りを見た生徒達は、  
そのあまりに卑猥な腰の動きに興奮のボルテ  
ージを上げ、大声で嘲笑った。  
そして、誰からともなく手拍子が叩かれ始  
め、真琴は自然とそのリズムに合わせて腰を  
前後に振らなければならなくなった。  
「先生、表情が堅いですよ！最後は笑顔で歩  
きましたよう！」  
ゴールまで残り五十メートルほどになったと  
ころで、田沼は羞恥に咽ぶ担任教師にそう呼  
び掛けた。  
「わ、分かったよ・・・」  
真琴はそう答えると、強張っていた表情をゆ  
っくりと崩していき、引きつった笑みを浮か  
べて見せた。  
「オオッー、先生また笑ってるぜ！俺達に裸  
を見られてよっぽど嬉しいんだな（笑）」

「チ○コも痙攣してやがる、こりやどうしよ  
うもないド変態教師だぜへ笑」  
「先生、私達に裸を見られてそんなに嬉しい  
の？」  
生徒達からそうした声が浴びせられると、真  
琴はどうしようもない羞恥に襲われ思わず笑  
顔を崩してしまった。  
「先生、ほら笑顔でしょ！」  
田沼はそう言っ注て注意すると、イケメン教師  
のお尻を再びピシャツと平手打ちした。  
そうして、真琴が恥ずかさのあまり少し  
でも笑顔を崩すと、すぐに背後から田沼がお  
尻を平手打ちしたため、真琴は腰を前後に振  
りながら引きつった笑顔で浮かべ続けて歩く  
ことになった。ああっ、僕はなんてはしたな  
いマネをしているんだ・・。真琴は運動会  
が行われている校庭を裸踊りしながら笑顔を  
浮かべて歩いている自分が信じられなかった  
そして、極限の羞恥の中で無理に笑顔を浮か

べ 続 け て い る こ と で 、 だ ん だ ん 気 が お か し く  
な り そ う に な っ て い た 。  
「 先 生 、 ほ ら あ と 少 し で す よ ！ も っ と 腰 を 前  
後 に 激 し く 振 っ て ！ 」  
ゴ ー ル ま で 残 り 二 十 メ ー ト ル ほ ど の と こ ろ ま  
で や っ て 来 る と 、 田 沼 は そ う 言 っ て 檄 を 飛 ば  
し 、 再 び 担 任 教 師 の 尻 を 平 手 打 ち し た 。  
「 あ あ っ ・ ・ ・ 」  
真 琴 は 尻 に 伝 わ る 痛 み に よ っ て 心 の 中 で 何 か  
が 弾 け 飛 ん だ の か 、 急 に 腰 を 激 し く 前 後 に 振  
り 乱 し 始 め た 。 そ れ は 、 一 流 の セ ク シ ー ダ ン  
サ ー 顔 負 け の キ レ キ レ の 腰 の 振 り で 、 そ れ を  
見 た 生 徒 や 父 兄 、 さ ら に は 同 僚 教 師 達 ま で が  
全 員 立 ち 上 が っ て 手 拍 子 を 叩 き 出 し た 。  
あ あ っ 、 こ ん な は し た な い マ ネ を し て い る  
の に 、 な ん て 気 持 ち 良 い ん だ ・ ・ ・ 。 真 琴 は  
腰 を 振 り 乱 し な が ら 、 初 め て 味 わ う エ ク ス タ  
シ ー に 身 を 預 け た 。 そ の 大 き く 膨 ら ん だ イ チ  
モ ツ の 先 端 は 濡 れ 、 少 し で も 扱 こ う も の な ら  
白 濁 の 汁 が 勢 い 良 く 迸 り そ う だ っ た 。

「先生、ほらあと少し！」

ゴールまで残り十メートルを切ったところで、田沼は声を掛けると、背後から担任教師

のイチモツを驚掴みした。

「あああっ」

真琴は恥ずかしい喘ぎ声を漏らし、思わず立ち止まって悶え狂った。

イケメン教師の体の奥で蠢く欲情はもう暴発寸前で、校庭にいる全員がその時が訪れるのを食い入るように見つめていた。

■ 海老沢薫 B L O G

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。



■ 海老沢薫 Web 連載小説  
『イケメン春輝 二十歳の憂鬱』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=31764>

・ ・ ・ 大学二年生の藤島春輝は、大学の学園祭のミスターコンテストに無理矢理エントリーさせられ、そのステータジ上で罍に嵌められ、大勢の学生達が見つめる前で死ぬほど恥ずかしい痴態を晒してしまう。それでも見事グランプリを受賞した春輝は、セレモニーとして一糸纏わぬ姿で大学のキャンパス内を練り歩き、他の学生達の見世物になったのだった。数日後、ミスターコンテスト実行委員会の学生から連絡を受けた春輝は、毎年恒例のグランプリ受賞者の記念写真集を製作する話を聞かされる。今年のステータジ上で前代未聞の痴態を披露した事からヌード写真集にすることが決まり、実行委員会の主要メンバーである須藤から脅され

た春輝は仕方なく撮影に応じることになり・・・。

後日、早速授業中の大教室で撮影をする。とになった春輝は、一番後ろの席で須藤に命じられるまま服や下着を脱いでいき、糸纏わぬ姿でポーズを披露する。

そうして撮影はだんだんエスカレートしていく、イケメン学生は授業中の大教室だけでなく、図書館や学生食堂でも極限の羞恥地獄を味わうことになるのだった。

『イケメン社長 聖哉25歳 | 体を賭けた  
屈辱の取引 | 大型ショッピングモール編』

[https://regimag.jp/bo/book\\_view/?book=18357](https://regimag.jp/bo/book_view/?book=18357)

・ ・ 吉川聖哉は、大学生時代に起業した二十五歳の若き事業家だった。頭脳明晰で抜群のルックスを持ち、社交的な聖哉はまさにイケメン社長と呼ぶにふさわしい華やかさを備えていた。

大学生の頃には、将来有望な若手イケメン社長として一部のメディアでも取り上げられるなど、他人が羨むほど順風満帆な人生を送っていた。

しかし、いつしか聖哉の会社の業績は低迷し、華やかだった生活は次第に陰りを見せていく。

自分に付いてきてくれる社員のため、そして自分の理想のために会社を立て直すべく日夜必死に働き続ける聖哉。

かつて将来有望な若手社長としてもてはやされていたイケメン社長は、どんな泥臭い仕

事でも引き受けるようになり、心ない取引先  
やユーザー達からの羞恥の命令にも従い、人  
生を翻弄されていくのだった。

『イケメン社長 聖哉25歳 ― 体で償う屈辱のクレーム ― 会議室篇』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=38623>

・ ・ ・ 25歳のイケメン社長、吉川聖哉は大学生時代に起業し、若くして成功したカリスマ社長であつた。

しかし、聖哉の会社は次第に業績が悪化し倒産の危機に瀕する状況まで追い込まれていった。

そのため、聖哉は会社存続のために新たに人材派遣事業を興し、様々な企業と取引を始める。

そんなある時、聖哉の元に大口の取引先から一本のクレームの電話が入つた。

取引先の相手は電話越しに聖哉を激しく罵倒し、今すぐ自社まで謝罪に来るよう命じた。

ただでさえ倒産の危機に直面している会社は、この大口の取引先を絶対に失うわけにはいかず、慌てて謝罪へと向かう社長の聖哉。

而して、取引先の会議室へ案内された聖哉

の元に担当部長と現場責任者、そして問題を  
起こした当事者である聖哉の会社の社員が現  
れ・・・。  
平身低頭に謝罪する聖哉に対し、取引先の  
相手は誠意ある謝罪を要求し、あまりにも屈  
辱的な命令を突き付ける。  
社長としてのプライドだけでなく、一人の  
人間としての尊厳までも奪われるような命令  
に聖哉は憤りを覚えずにはいられたかったが  
自分の会社や社員を守り抜くために彼らの命  
令に従う覚悟を決め、ついに底なしの羞恥地  
獄へと堕ちていくのだった。